

Library News



京教図書館 News

2008

1

私のすすめるこの1冊・・・奈倉洋子（英文学科 教授） （前図書館長）

松宮哲夫 『伝説の算数教科書〈緑表紙〉』

この本は、2005年12月、本学附属図書館で開催した「塩野直道関係著作展—緑表紙の算数教科書生みの親」と、その目録が契機となって、「岩波科学ライブラリー」の一冊として出版されることになったということである。企画展の際、松宮先生に相談にのっていただき、「塩野直道の仕事と業績」などを目録に書いていただいた。本学図書館の企画展が、算数教育に資する本を世に送り出すきっかけとなることができたことは、研究・教育の知的センターとして、社会への情報の発信という役割も担っている図書館にとって、望外の喜びである。企画展に関わった者として、この本を紹介したい。

この本のタイトルになっている「伝説の算数教科書〈緑表紙〉」とは、塩野直道が中心となって編纂した、昭和9（1934）年から昭和15年まで刊行された『尋常小学算術』のことで、緑色の表紙だったことから、緑表紙と呼ばれた。第1学年用上、第1学年用下と、各学年2冊ずつに分かれていて、昭和10年から18年まで教科書として使われた。一番はじめに出版された1学年用上は、全ページが玉入れ、運動会など、子どもの身近な生活を題材にしたカラーの絵から成り、子どもが親しめるように、視覚的に数の概念を把握できるようにという工夫がなされている画期的なものだった。算術教育界だけでなく、一般の人々の間にも大きな反響があり、「白熱的な人気を博して好評絶賛」されたという。当時の熱心な小学校の先生たちは、「希望の緑表紙」の教科書と呼んだそうだ。著者は、好評を博した理由として、絵図そのものが教育内容であり、それが色刷りだったこと、児童の生活事象から採った絵図を観察しながら数理を導き、授業を進めたことをあげている。

緑表紙の算術教育の目的は、「数理思想の開発」と「日常生活の数理的訓練」だった。それまでの算術は、「普通の算術中には理論なし」として、日常の計算に習熟させることを主な目的にしていた。そこには、「数理思想の開発」すなわち科学的精神の養成という思想が欠落していた。というより、算術にはそんなものは必要ないという考え方だった。緑表紙の画期的な意義は、「数理思想の開発」という精神に貫かれていて、それを子どもの日常生活と結びつけたことにある。日常の具体的な事実の中から数理的な概念を把握させ、それを通じて数理的な思想を養うという方法である。

この緑表紙は、昭和11年、オスロで開かれた国際数学会議の中の数学教育部会でも、大きな関心をもたれたということである。

（次ページに続く）

(次ページから続く)

数学や理科を苦手とする児童・生徒が少なくない現在の日本の状況を考える時、塩野直道の、身近な具体的事実から数理的な概念を把握させ、それを通じて科学的精神を養うという思想、その思想を根底にした、児童・生徒に親しいものと感じられる教材の開発のもつ意味は、いまもなお新しいといえるのではないだろうか。当時の数学教育改造運動の動向、小倉金之助の思想などを視野に入れながら、なぜ、どのようにして塩野直道が緑表紙を作り上げるにいたったのかについて克明に書かれたこの本は、現在の教育のあり方に一石を投じ、今後の方向性を考えさせてくれる。ぜひ一読していただきたい。

『伝説の算数教科書〈緑表紙〉』 著者：松宮哲夫 出版年：2007年9月
定価：1,365円 ISBN 9784000074759 出版社：岩波書店 寄贈手続中

■ 図書館からのニュース

1. 図書の返却をお忘れなく！

冬季休業中の長期貸出の返却期日は1月15日（火）です。期日を過ぎると罰則がかかり、遅れた日数だけ貸出禁止となります。ご注意ください。

2. 1月の論文検索・収集法講座

雑誌論文のデータベース CiNii を使った論文の検索から、実際の入手方法まで、パソコンを使いながら実習形式で説明します。

今年度の開催は1月で終了します。「来年度は論文を書かなくてはいけない」という方、まずは準備として参加してみてください。

事前申込は不要です。直接カウンターまでお越し下さい。

1月11日（金） 16:45-17:15

1月16日（水） 13:30-14:00

1月22日（火） 16:45-17:15

3. 春季休業に伴う長期貸出について

区分	学部学生	大学院生・教職員
貸出期間	1月22日（火）～3月31日（月）	1月7日（月）～3月14日（金）
貸出冊数	5冊	10冊
返却期日	2008年4月12日（土）	2008年4月12日（土）

* 視聴覚資料は除きます。

* 長期貸出図書については、貸出の更新はできません。

一度返却してから、翌日貸出の手続きをとってください。

* 一般利用者の方は長期貸出の対象外となります。

* 卒業、修了予定の人の返却期限日は2008年3月1日（土）となります。

4. 書庫内書架の転倒防止工事について

平成20年1月13日（日）、14日（月・祝）にかけて書庫内の一部の書架について、転倒防止工事を行います。ご協力よろしくお願いたします。

■ 論のくちび理のむすび・・・ 内田利広(教育学科 准教授)

「教育相談に求められるSCとの連携についての一考察」

内田利広・今度義則：京都教育大学紀要N o 111、PP1-16, 2007

スクールカウンセラー（以下SC）が、学校現場に派遣されるようになって13年目になります。平成7年度に、全国の小中学校154校に配置されたのが最初でした。これまで学校という聖域の中に、教師以外の専門家が入っていくことはなかったので、「黒船の来襲」に例えられるほどインパクトの大きい出来事でした。その後、SCの配置校は増加し、平成13年度には、全ての公立中学校にSCを配置する方針が示され、SCが学校の教職員の一員として位置づけられることになりました。平成17年度には、全国の公立中学校約1万校に配置され、ほぼ全ての中学校にSCが居るという状況になりました。

本学の学生の話や、中学生の頃にSCが学校に来ていたこと、また相談に行ったこともあるという話を聞くと、自分の小中学校の頃では考えられなかった状況だなと思います。

ただ、SCはほぼ全ての中学校に配置されていますが、その活用については、学校によって大きく異なっています。SCと連携して、活用しようとする教職員の意識やその活用を推し進めていく窓口となる教員（SCコーディネーターと言います）の意識により、非常にうまく機能している学校と、なかなか十分に活用されていない学校とがあります。

そのあたりの意識について調べてみようというのが、今回の論文の目的でした。教育相談担当教諭（SCコーディネーター）100名、担任99名、スクールカウンセラー76名にアンケートを郵送でお願いし、集計しました。

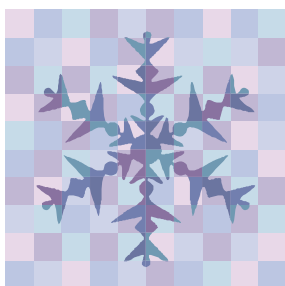
その結果、教育相談教諭は、SCの配置や活動が教師のメンタケアや負担の軽減、チームワークへの寄与など＜教師の援助＞において有効であり、また生徒と教師の人間関係作りなどの＜教育への寄与＞に有効であると考えていることが示されました。一方で、担任は教育相談と生徒指導の間において、＜指導のジレンマ＞を感じており、SCは教師自身がSCと連携することに不安を感じているのではないかということが示された。

このように、SCと教員との連携は、必要不可欠であるが、そこにはお互いの十分な理解と信頼関係がないとうまく機能していかないことが示された。

今後教員を目指す皆さんにとっても、生徒指導において、SCとの連携という問題は必ず起こってくる問題であり、参考にさせていただければと思います。

全文は図書館HP「京都教育大学紀要」で、ご覧いただけます。

■ 図書館開館スケジュール



(通 常)

開館時間 : 9:00

閉館時間 : 21:00

一部期間は 17:00 に閉館します

下記カレンダー「~17:00」と記載

1

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
		1 祝	2	3	4	5
		休館	休館	休館	休館	休館
6	7	8	9	10	11	12
休館	~17:00	~17:00	~17:00			~17:00
13	14 祝	15	16	17	18	19
休館	休館				休館	休館
20	21	22	23	24	25	26
休館						~17:00
27	28	29	30	31		
休館						

1月7日(月)から1月9日(水)まで短縮開館です。

1月14日(月)は祝日のため休館します。

1月18日(金)から20日(日)まで大学入試センター試験のため休館します。

2

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
					1	2
						~17:00
3	4	5	6 整	7	8	9
休館			休館			~17:00
10	11 祝	12	13	14	15	16
休館	休館					休館
17	18	19	20	21	22	23
休館						~17:00
24	25	26	27	28	29	
休館	休館					

2月6日(水)は館内整理のため休館します。

2月11日(月)は祝日のため休館します。

2月16日(土)は停電に伴うネットワーク停止により休館します。

2月25日(月)は入学試験のため休館します。

京教図書館 News No. 88 2008年1月号

編集発行：京都教育大学附属図書館

発行日：平成20年1月4日

内容に関するお問い合わせ先：

附属図書館(内線8176)



京都教育大学